

BOOK

港まち ぶらり

NAGOYA PORT TOWN 100TH ANNIVERSARY BOOK

港まち 100周年記念ブック



ぶらり港まち新聞 特別号
EXTRA ISSUE OF "BURARI MINATOMACHI SHINBUN"

TAKE
FREE!

はじめに

この本は、港まちづくり協議会が実施する100周年記念事業の一環として、「ぶらり港まち新聞」から誕生しました。

「ぶらり港まち新聞」は港まちのみなさんが主役。

2011年に創刊して以来、年に3回発行しながら10号まで発行してきました。

創刊号では、西築地小学校の当時3年生の子どもたちが制作した

「未来の港まち」の模型を取材し、子どもたちが描く港まちの未来を特集しました。

そこで話題に上がったのが、4年後にやってくる小学校創立100周年について。

「学校の100周年は、まちの100周年。その時に港まちの魅力がいっぱい詰まった本を作ろう!」と、

まだ新聞を1号も作っていないにも関わらず、私たちは大きな目標を掲げたのです。

しかし同時にそれは、いつかの遠い未来のような気もしていました。

それから4年、実際に港まちをぶらりと歩いて、聞いて、見て、

まちで出逢ったさまざまな人たちと世間話をしたり、時には語り合ったりしながら

今のまちに漂うありのままの空気感を誌面に残そうという気持ちで取材をしてきました。

同時に「ネタを消費するのではなく、種を見つけて育てるように」という気持ちも大切にしていました。

しかし今振り返ってみれば、育てられたのは、私たちの方だったのかもしれません。

いつしか港の独特なまちの魅力にどっぷりとはまり、まちへの想いはぐんぐん大きくなっていきました。

今回、同書を作るにあたり、私たちは改めて港まちを時間をかけてぶらりとまわり

港まちで暮らす人や働く人、遊びに来ている人など、たくさんの人たちに出会い

時にはお酒を酌み交わしながら、お話を伺うことができました。

ご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。

この本の中には、港まちならではの魅力や、ここにしかない文化・人々の生活がたくさん詰まっています。

同書を片手に、ぜひ名古屋の港まちを訪ねてみてください。

きっとおもしろい出会いがあるはずです。

この本が、港まちのこれから100年を考える一助となることを祈って。

港まちづくり協議会



BOOK
港
ま
ち
ぶ
ら
り

CONTENTS



はじめに



002 本当のみなとまちのものがたり



008 みんなとまちを話そう

045 みんなとまちを話そう
-みなと祭-



067 KOIKUCHI LOVER.



073 みんなとまちを話そう
-夜の港まち-



087 WE LOVE MINATO FOODS!

093 うつりゆく名古屋の港まち

106 MINATOMACHI TOWN MAP

108 ぶらり港まち新聞

110 港まちづくり協議会・Minatomachi POTLUCK BUILDING

おわりに



本当のみなとまちのものがたり

1907年の名古屋港開港以来、港まちには『ものづくり名古屋』で生み出された陶磁器や織物などの商品で一旗揚げようと、全国から多くの人々が集い始めました。開港から8年後の1915年、そんな活気溢れる港まちに「西築地尋常小学校（現・西築地小学校）」が開校。そして2015年、「西築地小学校」は創立100周年の節目の年を迎えました。

港まち自体もこの100年の間、時代の大きなうねりの中で急速にその姿を変えています。そうした中で迎えたこの節目は、これまでを振り返り、次の100年を考える良い機会なのかもしれません。

そんな折、西築地小学校の子どもたちが「港まち」の今と昔について学ぶ様子を取材しました。一生懸命、まちのことを知ろうとする子どもたちの姿を通して、普段見落としていたまちの魅力や新しい発見がいくつもありました。私たちが確かな未来を描くためには、それぞれがしっかりとまちを見つめ、そこに立ち上がる本当のストーリーを探求することが大切なかもしれません。



100年後に残したい港まちの風景をみんなで考えよう！

港まちづくり協議会のある西築地小学校は本年で100周年を迎えた。このまちに暮らす子どもたちが通い、また多くの大人たちもかつて通ったまちの小学校が100歳に！それは港まちにとっても過去と未来を繋ぐ大きな節目です。100周年を機に港まちが歩んできたこれまでの100年と、これからつくっていく未来の100年をみんなで考えたい。そんな思いから西築地小学校と港まちづくり協議会とともに取り組む「港まち100周年事業」が実現したのです。

事業のメインとなる全3回の記念授業には西築地小学校の5年生と6年生の子どもたち73名が参加。地域に残る懐かしい写真を集めて、それによつわる物語を地元の人たちから聞き取りアーカイブ化する「ヒストリーピン」というプログラムを日本各地で推進している富士通の原田博一さんを招き、活発で楽しいフィールドワークを行いました。

1回目は、各家庭から集めてきてもらったたくさんの写真を見ながらお互いの感想を語り合い、「いいな」と感じた写真を選んでなぜそう思ったのかをみんなで話し合うという授業。そこで浮かび上がってきたのは、港まちがずっと大切にしてきた、そしてこれからも大切にしていきたいと思うさまざまなエッセンス。

2回目には、そのエッセンスを踏まえて実際に子どもたちがまちに飛び出し、未来に残したい風景を自由に切り取ってきてもらいました。タブレットを抱えてお気に入りの風景を撮影するその表情は生き生きと輝いていてとて





も楽しそう。水族館、公園、神社といった日頃当たり前のように見慣れているおなじみの風景もあれば、数年前からシャッターが降りたままになってしまった少しさみしい町並みの写真も。市場で働くおじさんの笑顔や、大好きなお店でいつも食べるお気に入りの料理まで登場しました。子どもたちが切り取ったいくつもの風景には、それぞれに、大切にしたい、未来までずっと残したいと思う理由があります。

3回目の授業ではそんな写真を使い、まちの人たちにインタビューした取材メモをまとめて新聞づくりに挑戦。同じまちに暮らす子どもたちでも「大切にしたい風景」はみんな違います。でも、その場所で過ごした記憶や目に焼き付いたまちの風景は、みんながいつか大人になったとき、未来の自分を支えてくれる心強い存在になるでしょう。

まちの未来、それは私たちひとりひとりの日々の暮らし方、生き方の総体として時間とともに築き上げられていくもの。まちの移り変わりを記憶する古い写真の数々と、子どもたちが純粋な感性で切り取った今の港まちの風景。それらを手がかりに、まちを愛する思いを未来へ受け継ぎ、世代を越えてまちの未来を考える貴重な体験を共有できた今回の取り組みは、港まち100周年という節目を飾るにふさわしい有意義で満ち足りた時間となりました。

p.4-5：取材メモをまとめながら「まちの新聞」を作る授業（3回目）

p.6-7：老人クラブの方々をお招きして、なつかしい写真のエピソードをうかがった夏休みの自由研究の様子。

LET'S TALK ABOUT
OUR TOWN TOGETHER!

みんなとまちを 話そう。

「港まちってどんなところ?」「港まちの好きなところは?」
いつもの港まちで出会った人たちに、普段なかなか聞くことができない
港まちの話や、まちに対する思いなどを話してもらいました。
そこから、港まちならではの魅力、文化、
まちと人の関係性などが見えてきます。
どうぞみなさんのお話に耳を傾けてみてください。



まちのことをやつとると

いろいろあるけどそれも楽しいね

高羽 章 / 西築地学区連絡協議会 会長・港まちづくり協議会 会長 撮影場所:西築地商店街 ➔

町内会長になったのは36年前、41歳の時。そのころの町はいまよりずっと元気で活気もあったよ。会長としてさらに町を盛り上げたいと思ったけれども、少なくともそのままの状態を維持だけはしていかなければという思いがあった。若くして就任したのもあって当時は前進的というか画期的新しいことにもいろいろ挑戦してきたと思う。初めの頃、町の連絡協議会に出ても、新人の席が指示されず戸惑った。上座には長老や年功のある人がいた気がする。若さに任せて意見を出しているうちに、明治生まれの古い人たちから順に辞職してしまった。若造が出てきて新しい時代に変わるんだという空気を感じたのかな。世代交代のタイミングに気づいたのかもしれないね。

小学校のPTAの規約もそれまでのものがすごく読みづらかった。戦後にできたものらしいが、分厚い巻紙に裏表書かれていてとにかく長い。しかも古文書みたいな古い文字で書かれていてね。当時の教務主任の先生が国語の先生だったので私が文章を書き直して先生に校正をお願いし

て。なるべく時代に合ったものに改訂したんだよ。

お祭りの形態も大きく変えた。まずは踊り子さんの並び方。人数が多くても多く見えるように工夫して、今のような流し踊りも始めてみた。神社を出る時、人と山車が一体であったのを流し踊りの踊り子と山車につく人を分離した。

最初に自分の町内だけで3年間続けてみて、これはなかなかいける！ということで学区全体でも取り入れたらどうかということになったんだけどね。始めの数年は踊りの先生方から歩きながら踊るだなんて邪道だとお叱りを受けたよ。説明をさせてもらい実施し、3年目に全部の町内が参加できるようになった。どうしてそこまでしてこだわったかというとね、ああやって大通りで流し踊りをやると踊り子さんたちが注目してもらえるでしょう。それから20年近く経って今ではあれがみなと祭の形だと自信を持って言えるまでになったんじゃないかな。

町の中に立っていろんなことをやるというのはもちろん苦労は多い

けど、それ以上に楽しい。当然トラブルもいっぱい起こる。でもピンチはチャンス！っていうか、どういうわけか冷静になるんだわ(笑)。意見がぶつかっても冷静さを持って対応する。そうやっていろいろ生み出していくのは楽しいよ。

これからこの町で何かに挑戦したいという若い世代の人たちに言えることがあるとしたら… そうだね、思いついたらできるだけ早く行動に移すことかな。その勢いや思いを忘れないうちに。考えることは大事だけどやりながら考えればいいんじゃないかな。苦労したとしても実際に経験したことなどなんでも自信につながるから。この町には年に一度の祭りがあって、その度にいろんなことに打ち当たって乗り越えて。それをずっと続けてきた実績がある。だから思っている以上に大きな力が培われているし、人と人をつなぐ絆も知らず知らずのうちに強くなっているんじゃないかなと思うよ。





↑ 左から 鈴木艸殿、河野清弘、宇佐見早苗、古橋敬一（港まちづくり協議会）、大橋克也、関谷純二、安田公雄、稻鍋万二郎

同じ方向を向いてれば
世代を越えても
いい関係が続くよね

お話を聞いた人：稻鍋万二郎
撮影場所：居酒屋 美楽

ここにいるのはほとんどみんな町内会長とか学区の役員。大抵は学区の定例会が終わった後に集まって飲み会が始まるんだけど「呼ばれたら断らない！」っていう暗黙の掟がある（笑）。真面目なことも話すけどくだらない話もいっぱいしてるよ。

上は80代の人から自分みたいに40代の若いのもいる。年齢に幅はあるけど、80代の先輩は「僕はまだ若造だから」と言って決して上からものを言うわけでもなく、町のことに取り組む仲間として対等な気持ちで話してくれる。みんな向いてる方向が同じというか似てる者同士だから話も盛り

上がるし、関係が続くんだけよね。町に暮らす年数や出身地が違っていても基本的にみんな町を良くしたいと思ってる。この町がこうなったらいいねっていう思いの部分が同じだから、やり方や手段が違ったとしても尊重し合える。別に改まって会議とか反省会とかっていって集まらなくても飲みながら自然に振り返りができたり意見を交わしたりできるのがいいね。

そもそも僕が町内会長になったのはその時、単に他にやる人がいなかったから。ただそれだけ。大きな覚悟があったというわけじゃない。だけど一度引き受けたからには形だ

けというわけにはいかないし、覚悟や責任を感じずにはいられなくなった。町内の人々はそういう僕の気持ちを理解してくれて、誰かが助けてくれたりできない時に代わりにやってくれたりするよ。外側に身を置いていた時にあれこれ聞こえてきた町の中のいろんな噂なんかもさ、実際に中に入ってる自分で見たり聞いたりして直接関わると実は全然違ってたとかさ、そんなことが多いものなんだよね。それもやってみてわかったこと。

この町の要でもある祭りに関してはまだまだ未熟なことばかりだと思う。恒例行事として毎年ただこなすだけに

なってるっていうのかな。大事なのはこれを町の伝統にしていくことだと思う。伝統化というのは、その行事に対して敬う気持ち、敬意を持って取り組む姿勢が大事。それがまだできていないうような気がする。たかだか69年ぐらいじゃあまだ伝統と呼ぶには歴史が浅すぎるのか、それとも他に問題があるのか。でもこれまで続けてきた分だけでも積み重ねられてきているものはあるはず。太鼓や屋形も成熟しつつあると思うし。あとは町の人たちがそれを伝統にしていくんだという思いを強く持つこと、そういう意識改革が大事だと思う。町を挙げてそういう方

に向っていかな、外からの意見や都合で簡単に形が変わったり無くなったりしかねないから。町にあるいろいろな問題点や課題を考えるとき、世代間の違いのことがよく言われるけどそこだけが問題というわけじゃない。そもそも町のことは利害で動くようなことではないし、町を大切に思うとか、祭りなどの伝統や文化を敬うとか、そこを共有できることが大事でさまざまな世代や立場の人が対等に臨めるものにしていきたいよね。



↑ 伊藤こすみ / 中華料理二十番香港店 店主

長くやってると
嬉しいこともあります



主人も私も港の出身ではないけど、中華料理の修行をしてた頃にそろそろ自分たちの店を出そうと思ってあちこち探していく、たまたま知り合いに紹介されてここに来たの。それがもう今から44年前。当時は反対もあってね。町の雰囲気が良くないって。その頃は本当にお客様同士で目が合うだけで喧嘩が始まったりすることも珍しくなかったよ。今ではもうそんなことはないけどね。

それと昔はいろんな国の人たちが食べに来てくれた。フィリピンの人やギリシャの人、本当にいろいろ。言葉が通じなくてもね、隣が「ローズバー」っていう外人バーだったからそこの

店長さんが通訳してくださってね。うちの子もまだ小さかったもんで店の隅に座らせてたら外国の船乗りさんたちが珍しい猿を連れてきてくれたりして、子どもも喜んでね。そんな異国情緒も今はなくなつたわ。

でも長くやってると嬉しいこともあるよ。恋愛中によく来てくれてた二人がその後結婚して、息子さんが大きくなってひとりで食べに来てくれたけど最初はその二人の子どもさんは知らないで。ある日、親子揃って来てくれて初めて息子さんだったと知ってみんなで昔のことを懐かしがってくれてね。そういうのはすごく嬉しいね。



↑ 伊藤和子 / ミテラ美容室 店主

表情まで明るくなつてくださると
私まで嬉しくなります



お店はもう30年。場所は途中で変わりましたけどね。今はお客様のほとんどが地元の方です。常連のお馴染みさんが長く来てくださってるもんだから、その方の体調や気分の変化が髪を触ればなんとなくわかるんですよ。今日は疲れてらっしゃるなあと。それで、そんなことをきっかけにいろんなお話をします。ここではリラックスして心も解放されるのかしらね。自然に話をしてくださるから私は聞き役。もちろん、他では話さないように配慮してますよ。安心してリラックスしてもらいたいから。

お店に入って来られた時は元気がなくても髪を綺麗にして

帰る頃には気分まで明るくなつて表情も変わる。そういう瞬間にやりがいを感じます。昔は遠くから来てくださってた方多かったけど多くが高齢になられてなかなかここまで来てくださる方も少なくなりましたね。

私も最近、息子に「いつまでやるの?」って聞かれて「わ、そういえば私ももういい年だわ!」なんて我に返ったんですよ。いつまでなんて考えたことがなかったから。それくらいこの仕事が好き。体が資本ですけどやれるまで頑張りたいです。



↑ 左から 松岡たつ子、五藤貞二 / 珈琲アラモの常連さん

いつも同じ顔に会えるから
ついつい毎日来ちゃうのよ



五藤：おはようございます！僕はだいたい毎朝、出勤前のこの時間にここに寄る。住まいは半田だから家は6時頃に出てくるけどそのまま直接仕事場へは行かずに一旦ここで一息入れて、朝ご飯代わりのモーニング食べて、新聞を端から端まで読んで、ちょうどいい時間になるまで調整していよいよ出勤。これが日課。

松岡：私も近所に住んどるけど、毎日ここへ来るよ。家におっても、この時間はまだ旦那は寝とるし、若いものは勤めに出でくでしょ。その時間にひとりでここへ来て、ゆっくりするのが楽しみなのよね。

五藤：ここで会う人はもうだいたいみんな顔見知りだしね。ほとんど地元の人だよ。それにしてもアラモさんの常連さんはみんな朝早いね。

松岡：そうだね。いつもおるメンバーは一緒だけど、早い人はもっと早いね。

五藤：今日も私たちより先に来てたご近所さんたちがさつきもう何人か引き上げてたよ。

松岡：家でもコーヒーは飲めるしゆっくりできんわけじゃないのに、みんななんでここへ来るかねー。やっぱり友だちがおるからだろうね。



↑ 横田正広 / 名古屋港本町郵便局 局長

港まちには子どもの頃から
よく通っていました

仕事で港区に配属になったのはここが初めてですが、ここは私にとっては昔から馴染みのある町です。住まいが熱田区なので子どもの頃からみなと祭によく遊びに来たりしていましたし、小学生の頃はガーデンふ頭まで自転車で来ては釣り糸を垂れて魚釣りをしましたね。当時は本当によく釣れたんですよ。

港本町郵便局は港に一番近い郵便局だけあって、昔は港に着く船に乗っている外国人の利用も多かったと聞いています。今も船舶関係の学生たちの乗った実習船や大きな客船がときどき停泊しますので、水族館で遊んでからお土産

代わりに郵便局のグッズを買いに立ち寄ってくださることもありますね。

局長としては日頃から地元のみなさんともできるだけ交流を図りたいと思っています。場所柄、防災意識も高い町ですので災害に備えて、町内会長さんたちや防災士でもある前任の局長さんとともに連携して防災訓練のお手伝いなどにも参加しています。お年寄りの方も多い地域ですので、地元の行事を通じて町のみなさんの顔を知るよう努めています。

